
勇者なんてお断りだ！

優太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者なんてお断りだ！

【Nコード】

N2020X

【作者名】

優太

【あらすじ】

俺こと黒瀬軍司は、幼馴染みにして親友の柊春樹と、そいつの彼女である九重晴と共に、平和な日常を送っていた。そう、あんな事件があるまでは――

プロローグ（前書き）

この作品は、物語が進むにつれて残酷な描写、性的な描写が増えていきます（主に流血表現）。

なお、登場人物の皆が間一髪で助かるという保証もありません。

そういった描写、物語の苦手な方は、拙作を読まないことをおすすめします。

プロローグ

夕暮れ時、坂道を上る、三人の人影。少年二人に少女一人。彼らはちょうど遊びに行つた帰りで、この内真ん中に立っている長めの金髪の男子の家に向かう途中だ。

「んで俺は言つたわけよ。「向こう百年、恋人保証付きだ」ってな」

「はいはい、ごつつおさん」

「もお、恥ずかしいからやめてよお」

黒い短髪の男子が呆れ気味に、茶髪のセミロングの女子が恥ずかしそうに顔を俯かせて、それぞれ言葉を返す。よく見れば、金髪の彼と茶髪の彼女は手を繋いで歩いている。

「春樹はるきののろけ話は話の構成がうますぎて、胸焼け起こしそうなんだよ。あー、これについての反論は要らん」

「んー、けどやっぱ、お前も彼女でできればわかるぞ？ほんとに好きな相手なら、自慢したくてたまんねえから」

「さあな、年齢イコール彼女いない歴の俺には、さっぱりだ」

「それが顔が悪いからじゃなくて、単に女に興味がないからつてのが、なんとも悲しいな」

そう言われた黒髪の彼は、確かに容姿は悪くない。背は百八十センチの長身で、無駄のない引き締まった筋肉と、落ち着いた雰囲気を見せるクールな顔立ち。ともすれば、若くして百戦錬磨の風合いすら醸し出す彼は、どちらかと言わずともモテる方だ。

対する春樹と呼ばれた少年は、身長百七十五センチ、体格はひょろりと細く、目は常に好奇心に満ちたような輝きを持ち、笑顔の似合う、というより常に笑顔。ピアスを右耳の耳たぶに一つ、左耳の耳たぶに二つと軟骨に一つ空けており、着崩した麻のシャツが癪に触らないほど着こなしている。いわゆるチャライと言う部類に入りがやつだが、ム力つかないどころか、そうするのもアホらしいほどのイケメンだ。

「だよねー。こんなイケメン二人のそばにいたら、私見た目フツーだから恨まれるよ」

「なあに言ってるんだよ。晴^{はる}は十二分に可愛いから、嫉妬するのもアホらしいだろうよ。な、軍侍^{ぐんじ}」

「まあ、確かにな。普通に可愛いの種類に入るだろう」

そう言われた彼女——晴は、確かに可愛い。身長は百六十センチほど、体格は少し細め。ぱっちり開いた大きな二重、しかし顔のパーツは小さく、小動物的爱嬌を感じる。胸は大きくもなく小さすぎず、女性的な体格になっている。この、完璧すぎない可愛さが実は女子にも人気があり、彼女と付き合っている春樹は、実は男より女の嫉妬の目が痛かったりする。

「そつえばよ、春樹。件^{くだん}の小説はどうなった？」

「ん？ あー、あれね。いや実はさ、異世界に飛ぶときにどう飛ばすかで迷ったつきり、まったく進まねえんだ」

「それ、進んでないってことじゃん」

「晴う？ そーゆーのは言っちゃダメなんだよ？」

「ま、九重^{ここのえ}が言わなくとも俺が言っただけな」

「四面楚歌！？」

「それは違う」

両サイドからないと手を振られながら、がっくり肩を落とす春樹。そうやって他愛もない話をしながら帰路につく、はずだった。

不意に、眼前に黒い球体が現れる。効果音をつけるなら、もわつと言っ感じで。

「おい、春樹」

「ああ、こいつはやべえ」

「え、何、何？ これ何？」

「こいつは、ネタとしていただき！」

「そっちかい！」

ガシツ、とガッツポーズを決めた春樹に、軍侍が目敏く突っ込み

を入れる。

「まあ、やべえ展開なのは確かやね」

「とにかく、逃げるぞ」

といって振り向いた軍侍は、驚愕する。

「道が……ない」

軍侍に遅れて振り返った二人もまた、絶句していた。不意に、何かを背後に感じ取った軍侍が振り向く。

「——みんな、横に飛——」

軍侍の警告を掻き消し、キュオン、と間の抜けた音を最後に、彼らは気を失った。

第一話 勇者なんてお断りだ！

——なんだ、ここは。

……次元と次元の境界線、妾たちは狭間の世界と呼んでおる。

——あいつらはどうなった？

……案ずるでない。あの者たちも今ごろ、妾の仲間と話しておる。

ほう、しかし貴殿らは、どうにも強い精霊と巡り会う運命が共通するらしい。

——精霊？

……ああ。まだ名乗っていなかったのう。妾は蓮姫^{れんひめ}。火を司る精霊じゃ。妾の力、貸してやろうぞ、黒瀬^{くろせ}軍侍

——まあ、厄介事さえ引き込まねえなら好きにしゃがれ

……ふむ、なんとも豪傑な。ではまた、後程。存分に親睦を深めようではないか。

クスリ、と少女の笑い声が聞こえ、気配が遠ざかる。それと同時に、軍侍は浮わつた意識をしっかりと掴み取り、目を開けた。寝ていると気づき、腹筋だけで体全体を持ち上げて重心を顔の両サイドについた手に移し、さながらバク転するように起き上がった。

まず目に飛び込んできたのは、ひと、ヒト、人の群れ。ざわついた雰囲気が自分一点に浴びせられ、どうにも居心地が悪い。

「春樹」

「おうよ」

彼——柊春樹^{ひょうしゅ}もまた、手をつくところまでは同じで、そこから腕力と勢いで飛び上がって立ち上がる。

「晴、起きな」

周囲の警戒を軍侍に預け、春樹は未だ寝ている晴を起こしにかかる。

「んう……春樹？」

「ほら、起きなよ。こんなとこで寝てたら体痛めるぞ」

「うん」

そう言つて、かなり無警戒にムクツと上体を起こす晴。目を擦りながら前を見ると、ずつとざわついている群衆に目が止まる。

「あれ誰？」

かなりゆつくりした口調で、群衆を指差す晴に、春樹はさあと首を捻った。

「ようこそお出でくださいまし——」

「「よくもまあいけしゃあしゃあとようこそなんて言えたなあおい」

」

「ひうつ」

軍侍と春樹、二人の殺気のこもった速攻の反論に、落ち着いた笑みを浮かべていた、白いローブを着た少女が縮み上がる。

「俺らは来たくて来たわけじゃないし、」

「できることならすぐにでも帰りてえ」

「そこをようこそと言うのはな」

「「例え神が許そうとも、俺ら二人が許さねえ」」

息の合いすぎた、まるでリハでもしたのではないかと言うコンビネーションに、白ローブだけでなく、群衆すらおののく。が、第三者の介入により、二人は、警戒は解かないまでも殺気は抑えることができた。

「まあまあ、皆様。落ち着いてください。急にこちらの世界に召喚してしまったことについては、深くお詫び申し上げます」

言つて、これまた白いローブを着た、三十代くらい大人の色気とでも言わんばかりのナイスプロポーションの女性が、深々と頭を下げる。

「しかし、我々にも事情があつての急な召喚でございます。我々の世界は今、魔王に侵略されつつあります。我々は幾度なく立ち向かいましたが、魔王の配下にすら、辛うじて互角に戦えても、追い返すのがやっとです。そんな折、とある文献から、異世界から呼び込

んだものには特別な、聖なる力が宿ると言う記述を発見いたしました」

「つまり、俺たちに勇者をやれと？」

「はい、そのと——」

「だが断る」

軍侍が質問したにも関わらず、軍侍、そして春樹の断固拒否に、流石に大人の白ローブも啞然とした。しかし、ほんの一瞬だけ。こほん、と咳払いをし、気を取り直す。

「では、そちらの女性の方は——」

「私勇者とかつて柄じゃないんで。てか、自分達のことぐらい自分達で処理してくださいよ」

「あー、晴？ それは流石に言い過ぎでない？」

「だってそうじゃん。話の流れからして、こっつて異世界でしょ？ 異世界の人間がどうなろうと——て言うか、春樹以外どうなっても別にいいし」

立ち上がり、身長的側面で見てもやむを得ないが、上目使いにそんなことをさらっと言つてのけた晴を、唐突に春樹が抱き締めた（！？）。

「晴、俺も——」

「はいストップ。そんな状況じゃないね」

軍侍の冷静な突っ込みに、拗ねながらも体を離す春樹。そして晴に背を向けて白ローブたちを見る頃には、先までの冷めた目線があった。

「けどまあ、軍侍。多分こいつら、俺らが魔王倒すか、俺らが死ぬかで用なしになるまで、使い続けるのは確かだぜ？」

「ああ。だからどうするか決めかねてるのさ。ここにいるのは、全員勇者なんて偽善者にはなれない。かといって、断るのも、できそうにない。さて、どうしたものかな」

そこまで言つて隣を見ると、ぷくくと笑う春樹がいた。

「どうした？」

「お前、よくこんな状況楽しめるな。軍侍が饒舌になるときは、決まって楽しんでるときだ」

「は？ こんな状況……楽しまずにいれるかよ」

「だな。ま、一つ結論付けるとしたら、」

アイコンタクトをし、頷き合う二人。

「勇者なんてお断りだ！」

第一話 勇者なんてお断りだ！（後書き）

一週間単位で一話づつ公開する予定です。

まあ、三週間くらい空いたら作者が樹海へ修行に逝ったんだろうと思っ
てやっってください

第二話 豪腕の黒瀬、柔脚の柊

「うぬら、本当に勇者を断ると言うのか」

「だーかーらー、さつきから言ってるじゃん。勇者なんてもんは俺らには向かねえし、俺や晴に至ってはそこの訓練兵より使えないって」

「それなら、鍛えればよい」

「めんどくせえよ」

「まあそうでなくとも、春樹は魔王なんかと真っ向から殺り合おうって質じゃないだろうな」

「勝てない戦はしない主義、てかあ、平和主義者なんで」

「どの口が言ってるのよ」

バカ、と付け足して春樹の腕をペシッと軽く叩く晴。

ここは、謁見の間。玉座のあるステージには、まず玉座に、中世ヨーロッパの身分の高い貴族の着るような、派手な服装をした王らしき人物。向かって右側に、腰に剣を携えた、甲冑姿の若い男性が立っている。そして広間の側には、左右この広いスペースを埋め尽くさん限りの、人だらけ。貴族がいれば騎士もいる、文人もいて、どうやら魔術師らしき集団も見える。

「まあその話はどうでもいい。が、魔王を倒すには、勇者の肩書きが必要なのか？」

「おい軍侍、お前まさか——」

「春樹、お前は黙ってる」

「必要、とは言わん。ただ、魔王討伐と勇者の存在は、伝承で語られるほど我が国、否世界中の人間の意識に根強くあるのは確か」

「ほう、ならこうしたらどうだ。異世界から呼んだのは勇者ではなく豪傑たる武将で、そいつが協力してくれる、というものだ。これなら俺らは、勇者ではなくなる」

「軍侍！ それじゃあ魔王討伐は受けるってことかよ！」

「いや、お前は好きにしる。強要もしない」

「……少し、考える」

「そうか。ところで王よ、この提案、呑むか、呑まないか。決める」
「勇者ではないにしろ、協力はしてくれるか。それだけでも、十二分に有り難い。のだが……」

「じゃあさ、勇者の影武者作るってのは？」

「……それいい！」

あまりに奇妙な、男性のみの三重奏が晴に向けられる。

「それなら俺や軍侍が勇者にならずにすむし、影武者——影勇者も、一瞬とはいえいい気になれる。変な意味で一石二鳥じゃねえか！
さっすが我が愛しの晴」

言って抱き締めようとした春樹を、晴はするりと躲す。その先で彼がいじけたのは、言うまでもない。

「しかし影武者を立てるにしても、誰がするか、ということだが……」

……

沈黙が流れる。勇者とは、民の憧れ、国の絶対的戦力、魔王最大のライバルである。そんな役を、例え影武者とはいえ、誰が引き受けるのか。そこに、挙手するものが一人いた。

「偽物なら、やりますよ？」

「晴？」「九重？」

「だって影武者なら、大して重荷じゃないし。それに演じるだけなら、私得意だから」

「や、晴がそんなことする必要ねえよ。晴がするくらいなら俺が全部背負って——」

「だーめっ。春樹は、黒瀬くんと一緒に行かなきゃ。春樹が喧嘩強い、私知ってるんだから」

「剛腕の黒瀬、柔脚の柊、か」

昔の二人の通り名を、軍侍がポツリと呟く。それは、畏怖と尊敬から付けられた通り名。そして、彼らが表舞台に立つことをやめた、通り名。

「だから、私がやるの。嫌何て言わさないから」

「晴……」

「二人は、これで納得か？」

「異論はない」

「……晴がいいって言うなら。」

とりあえず、凝^じりは残るもののその場は収まる。すると次は、勇者に授けられる武具の問題——とは言えここは王宮のようだから、心配ないだろう。

その予測を裏付けるように、三人は数人の騎士によりどこかへ案内された。

（案内件護衛にかまかけた監視か……。気に食わんが、まあ俺でもそうしたか）

そこは、武器庫と言う名目の下にある宝物庫だった。どの武器を見ても細かな金銀細工はもちろん、色とりどり、煌びやかな宝石のようなものが嵌め込まれているのがほとんどだ。

「豪華、否豪華と言うべきか」

「俺ら三人にはとても合わねえなあ」

「私もシンプルの方がよかったあ」

「す、すべてこのように飾りすぎているわけではありませんので、お手数ですがお眼鏡に叶うものをお選びください」

監視について来た騎士の中のリーダーらしき人物が勇者（仮）を前に緊張したのか、おずおずと言った感じに促す。

「まあ、見るだけの価値はあるか」

軍侍の言葉に二人は頷き、中に入る。軍侍がまず目をつけたのは、異様な扱いを受けた防具だ。ここにある鎧はどれを取っても一式で揃っている。しかしそれは棚の上に、ただ忽然とそれだけで置いてあった。それは言うなれば、ただの籠手。肘まで届く普遍的構造と、手の甲を軽く覆っただけの、どちらかと言えば服の下に隠してつけるようなものだ。王は彼らに「勇者のために設けた武器庫だ」と言

うから、重厚なものしかないと思ったが、そうでもないようだ。色も黒く、隠匿性の高さから軍侍の趣向にどストライクだ。彼は迷わず、今着ている黒に少しだけプリントがなされた長袖のシャツの袖をまくり、それを装着する。

「うん、悪くない」

そう言つて、彼は左に目を向ける。それは武器庫の奥。たまたま顔を向けたただけだ。しかし彼は、衝撃的なまでに彼を魅了する武器を見つけた。

日本刀。それがこの系統の武器に与えられる総称だ。軍侍は近づいて手に取り、鞘からその刀を抜き出した。そこに現れたのは、闇を飲み込まんとするほどの輝きを放つ白刃で、直刃。そして、竜が彫り込まれている。一見派手な装飾品に見えなくもないが、その刃の鋭さ、刀の重量は間違いなく実戦用。それに気づき、軍侍は目を見張る。

「名刀とは、外見と性能とが優れているとは聞くが……これは、儀礼用ともとれる美しさの反面、確実に対象を殺す獰猛さがある。むしろ、怖いくらいだな」

軍侍は言つて、鞘に刀を納める。そしてそれを、腰のベルトに刺す。黒いジーンズに日本刀の組み合わせは、一見ミスマッチのようで、以外と合う。あるいは、軍侍の風格があるからこそなせる技か。「よし、これにしよう」

「軍侍、遅かったな」

彼が武器庫を出た頃には、春樹も晴も武具の選択を終えていた。春樹の外見の目立った特徴は、その腰にレイピアが刺さっていることだ。対する晴は、白いローブを羽織、その手には真っ直ぐな銀の棒が握られている。

「それでは皆様、武器の選定も終わられたようですし、本日はお疲れでしょうからお部屋へ案内させていただきます」

いつの間に来ていたのだろう。メイドが四人、彼らを出迎えた。

それを確認した騎士達は、彼女らが信頼できると思っているのだろう、先のリーダーが、黒い服のメイドの中で唯一淡い紫のメイド服を着た彼女に一礼してその場を去る。どうやら並みの騎士を遥かに凌ぐ権力者か、メイドと言う身分に縛られず尊敬される女性らしい。年齢30だろうか、軍侍ならともかくとして、春樹はそこを目敏く感じとる。しかし肌の若さは、現役女子高生で、そうでなくとも幼く見える晴と遜色ない。代わりに冷静さを感じさせる鋭い目とスツと通った鼻筋が、彼女を一気に大人の女性に押し上げる。

「メイド長、サラウイス・レイホードです。以後お見知りおきくださいませ」

言って、優雅に一礼する。彼女が、彼ら三人がこの世界に来て最初に名前を知ったものだ。そして同時に彼らの最大の協力者になることを、彼らはまだ知らない。

第三話別れ、そして、旅立ち（前編）

三人は、一人一部屋を宛がわれた。しかし彼らは今、軍侍の部屋に集まっている。三人の部屋は並んでいたのだが、真ん中が軍侍の部屋だったのと、春樹の頼みで集まったのだ。盗聴されていないことを確かめた軍侍と春樹は、テーブルへ戻る。軍侍が晴の対面へ座り、春樹は晴のとなりに、一人分の間を空けて座った。普通ならあり得ない行動に、軍侍が少し驚く。彼らは、いつ見ても手を繋ぎ、人目も憚らず密着する。それが、これだけのスペースが空けば、やはり不自然だった。

「さあ……話をしようか」

いつものヘラヘラした笑みを消し、神妙な面持ちで切り出す春樹。「といっても、俺はこれをもはや事後報告と同じ扱いで話すけどな」

「なにか、考えがあるの？ それなら私も——」

「晴は！ 晴は、ダメだ。影勇者の件もあるけど、それを差し引いても危ない」

晴の言葉を遮ってまで、春樹は彼女の意見を取り消す。それも、珍しい。彼ら二人はバカがつくほどのカップルだが、依存し合っているだけというわけではない。互いを尊敬し、尊重し、重宝し、そして、依存もしているのだろう。だからこそ、春樹の言動は目に見えておかしかった。しかし軍侍はこれで、ようやく春樹の考えを掴みかけてきた。それは、軍侍も考えたこと。

「お前、この城から逃げ出すのか？」

しかし春樹はブンブンと頭ん左右に振る。

「逃げ出すんじゃない。抜け出すのさ。そして軍侍とは別のルートで、魔王にたどり着く。俺はなんにも全てを投げ出すわけじゃない。あえて言うなら、勇者稼業から完全に離れるだけさ」

「けど、それじゃ春樹、一人で行動するの？」

「ああ。晴には、辛い思いさせるよな。ごめん」

「また、遠くなっちゃうの？」

言って擦り寄ろうとする晴を、春樹は彼女の肩を持って制した。

「今夜にはもう発つ。それを考慮した装備も、手に入れたんだ」

「それを考慮したって、お前。あそこにあるものは全部特殊能力付きだっての？」

「多分な。装備を自分のものだと思った瞬間から、明らかに体や考えに違和感があったからな」

春樹は今でこそ感情豊かで人との付き合いを大事にする。しかし昔は、信頼するものとししか関わらず、閉鎖的だった。そんな彼がうまく人の世を渡り歩いたのは、自分自身、そして近辺の変化に敏感なところがあつたからだ。そんな彼が言うのだ。信頼はできる。

しかし、今の問題はそこではなかった。

「まあそれはいいとして……九重はどうするつもりだ」

「お前に任せる」

「は？」

「晴を、守ってくれ。多分これは、地球でも、こっちでも変わらねえ」

絶対的信頼の証。自分の愛するものを、自分以外のものに守れと言うことは、想像を絶するほどに難しい。彼もできるなら、自分で守りたい。しかし春樹は自分の役割を把握していた。

自分には、軍侍のように他を圧倒する覇気はないし、実質の勇者も、勤まらない。影勇者は、晴に止められたこともあるが、それ以前に、自分ではいつか化けの皮が剥がれかねない。武を持った軍侍、演じ、騙すことに長けた晴。自分にはどちらともない。だが、一つだけ残された道はある。それを人は卑怯と罵り、下劣と蔑む。しかし、彼にはそれができる。否、それしかできない。

それが、暗の道。必要なもの、情報を得るためなら、影で人を痛め付け、殺め、その事すらすぐに忘れられるように暗躍する。夜襲奇襲は朝飯前。それだけが、彼に残された、有用性を示す道。

「軍侍、頼んだ」

「……ああ、頼まれた」

そのやり取りを最後に、この小さな、しかし、三人の道を決める重要な会議は終結し、解散となった。

「ごめんな、晴」

ここは、晴の部屋の前。今にも泣き出しそうな恋人を前に、春樹はなにも言えずにいた。否、言おうとはした。なにせ普段なら、言葉だけで彼女を紅潮させ、しばらくは口も聞けないほど悶絶させるのだから。しかし人間の頭と言うのは、必要なときに限って働かない。春樹はそんな自分の脳みそを深く呪った。

「……ごめん」

もう一度、謝る。それしかできなかった。

「ねえ、春樹」

声を僅かに震わせながら、晴は言う。

「ん？」

「ウチら、一緒に帰れるよね」

ウチ。それは晴の、昔の一人称。それが出ると言うことの意味を、春樹は知っている。だが、これは必ず果たせる約束ではない。帰れることを前提に話をしたとしよう。しかし春樹には、三人が笑って帰れる姿を、なぜか想像できなかった。思い浮かべても、自分の冷たい部分がそれを否定する。

だから彼は、答えを返す代わりに、晴の身を抱き寄せた。強く、きつく。応えるように、晴も首筋に手を回すように抱き締める。永遠にも近い沈黙が、二人を、温かく、包み込む。

二人は願っていた。このまま、時が止まればと。時間とは、離れて暮らすことになる恋人達の、最大にして最強の敵。どんな厳しい親よりも、交際を認めない親よりも、強く、無情で、抗えない。二人は、それを痛いほどよく理解していた。過去が、そうだったから。

第四話別れ、そして、旅立ち（後編）

コンコン、と扉をノックされる。春樹はベッドに寝そべってしていた思考を手放し、上体を起こす。
「どうぞ」

音もなく開けられたドアから現れたのは、淡い紫のメイド服――サラウイスだった。

「ああ、サラウイスさん」

「サラで構いませんよ」

「じゃあ、サラさんで」

フッフ、と笑いながら音もなくドアを後ろ手に閉める。

「おくつろぎのところ申し訳ありません。緊急のお話がありましたので」

「いや、気にしないでください」

言いながら、春樹は彼女の腹を探る。が、見えない。それは隠していることすら隠しているものとは別種の、純粹で素直な心という意味で。裏がないのだ。ないものを探すことほど、無理な話はない。
「今夜、なのでしょう？」

「聞いていたんですか？」

なにが、等聞かない。そもそも夜襲に備えた護衛と言う名目の監視役である騎士が部屋の外に立っている状態で、事情を知るもののみがわかる、最低限で誤解を生まない言葉で聞くのだ。少なくとも他意は、ない。それならば、話を進めるより他はない。

「私はただのメイドではありませんよ？」

「それは多分、彼らも気づいてます。で、用件は？」

「ええ、私が直々に、お世話をさせていただこうかと思ひまして」

そして近づきながら、口パクで抜け出す力添えを、と短く伝える。

正確に読み取った彼は、どちらにも取れる返答を返す。

「ちようどどうしようか悩んでたんで、助かります」

「ええ。では、まずこれを」

言つて、サラはベッドの縁に座り紙を取り出す。春樹も一人分の間を空け、その空間に紙を置かせた。

「なるほど」

それは、城の見取り図。ただし、一階と堀の内側のみ。ただ春樹も空を飛べるわけではない。ここからどう降りるかとは別として、当然、城の土を踏みながら外に出る。そしてサラは、指先に小さな光をとす。爪の先程もない、とても小さな光だ。

「こうすれば、楽ですよ」

言いながら、地図にルートを書く。どうやら光は、紙を焦がして線を引くためのものらしい。スタートとなるのは、やはりここをまっすぐに降りたと想定したところだ。そこから裏門へ、堀づたいに進む。だが彼女は堀の行き止まりに差し掛かる少し前で進路を曲げた。堀を突き破るようにして。

（地下通路があります）

口パクで伝える。春樹が頷くと、彼女は嬉しそうに顔をほころばせる。

「有り難う御座います、助かりました」

「いえ。では、また後程」

立ち上がり、礼をする。一瞬の隙もないその華麗な動作は称賛に値する。そして彼女は、無音の内に部屋の外へ出ていった。

晴、そして軍侍。二人は、どうにも眠れずにいた。だからこそ、二人が廊下で、否春樹の部屋の前で出くわしたのは、偶然では片を付けられない。今日がたまたまなのか、いつもそうなのか、深夜になった今、彼らを監視するものがいなかったのもまた、巡り合わせだろう。

「やはり心配か？」

「……うん」

「案外、寝てたりしてな」

「それは、ないと思う」

「……だよな」

コンコン、と軍侍が扉を打ってみるが、反応がない。本当に眠っているかも、と二人は期待し、二度目、今度は少し強めにノックする。やはり、返事がない。一度寝ると最低六時間は起きない男だ。もしかしたら寝ているかもしれない。しかし、同時に嫌な予感も過る。

——もう、出発しているかもしれない——

それは二人の共通の発想。だからこそ、軍侍は急いでドアを開けた。途端、吹き荒れる突風。それは扉の対面にある窓が開いていて、風の逃げ道がなかったのを、急に作り出したからだろう。軍侍と晴は腕で顔を庇い、一瞬後に防御姿勢を解く。そこには、窓のわくからこちらを見つめ、しゃがみこむ——というよりうんざりに近い姿勢の——春樹を見た。

「春樹……」

「タイミングが悪いねえ」

軍侍と春樹のやり取りは、一瞬で終わる。話すことはなにもないとでも言わんばかりに、彼は窓枠で、平然と立ち上がったからだ。

「ねえ、春樹」

晴が彼を呼ぶ。一瞬、彼の表情が揺らぐが、すぐに張り付いたようなヘラヘラとした顔に戻る。

「晴……」

「行かないで！」「幸せになれよ」

晴が叫んだのと、春樹が言ったのは同時。

晴が追いかけたのと、春樹が体を後ろに倒しのも、同時。

窓枠にしがみつき、晴は下を見る。くると宙で回った彼は、壁を軽く蹴って勢いを殺しながら、着実に降りていく。遅れてやってきた軍侍がそれを見て、驚きと興味の色を見せた。

「なるほど、落下しながら体を壁を蹴って浮かすなど、普通はできません。これがやつの言っていたものか」

「今はそれどころじゃないでしょ！？　はやく春樹を！」

「無駄だ。あいつはもう走り出した。止められん。なら残された俺らはどうする？　一緒に、走ればいいだろう。そうしたらいずれ、今は違う道でも、また巡り合う。それが、俺とあいつの縁であり、九重とあいつの縁だ」

「……春樹。うん、私、追いかける。じゃなくて、一緒に走る。見えなくても、ずっと隣にいるから」

地を蹴ってとうとう進み出した春樹の、小さくなる背中を見つめて、晴は決意する。

影武者じゃ、影勇者じゃダメだ。私も、戦う。そうやって、魔王でも何でも倒しちゃって、また、春樹に会いたい……！

一人は、フライングすれすれのスタートダッシュをした。だがこれは勝負ではない。いずれまた再会^あうための、そして日常に戻るための、言わば三人の過酷なランニング。

魔王に勝つにはまず力。それがなければ犬死にするだけだ。彼らの課題は、一流以上の戦闘技術を、いかに短期間で作り上げるか。それであつた。

第五話 勇者修行

「いああああ！」

甲高い声で木刀を振るった軍侍。目の前にいた騎士の木の盾が割れ、腕を強打する。一瞬の怯み、その一瞬こそが、戦場での命を左右する。それを証明するように、軍侍の木刀が騎士の首もとに突きつけられ、わずか一ミリの間合いで止まる。

「ひい！」

尻餅をつく騎士。彼は小隊長クラスで中々の腕はあるはずなのだが、軍侍の前では、見栄も、自負も、誇りも、完膚なきまで踏みこじられて倒される。木剣（刀ではない）は刀身の部分全てがなくなり、盾は粉碎し、一瞬で首に刀を突きつけられたのだ。完敗。しかもこの実力なら、初めから一本取られていたのだ。遊ばれた挙げ句、抵抗もできずに負けた。二人の実力の差を思い知らしめる試合だった。

「そこまで！」

会場がどよめく。軍侍の相手は、曲がりなりにも小隊長。しかも指折りの実力者だ。それがこつも呆気なくやられたのでは、彼らの動揺も頷けた。

「ふん、準備運動にもならないか」

一応、礼儀として左手に剣を納めて一礼する。しかし彼の言葉は、その行動には相反する。

「もっとだ。もっと上等なやつを用意しろ」

彼が苛立ちながら言うのも、致し方ない。春樹が城から抜けて一週間。軍侍は元々剣道をしていたこと、また実戦的剣術が身に付いていることから含めて、魔法の習得の片手間に剣の復習をしている。しかし打ち合いに出される兵は、どれも軍侍の役不足。とてもお話になりはしないから、彼がこうなるのも頷けた。対する晴は、本人の強い志願により戦う術を学ぶことにした。適正から言って魔法を

専攻したのだが、彼女にはかなりぴったりだったようで、普通なら灯火をつけるだけ、微風をふかせるだけで一ヶ月はかかると言うのに、今や彼女は中級魔法までは一つのジャンルを除いてすべて扱える。

魔法のランクには、最下級、下級、中級、上級、最上級、最高等級の六階級がある。振り分けの基準としては、殺傷性の高さ、効果範囲、術の使用魔力だ。とりあえずこのことは、また後述することしよう。

「流石はグンジ様。あのものも余裕で倒されるなんて、私ども、頼もしい限りです！」

「ああ、姫。かような場所にいてよろしいのか？」

軍侍に水とタオルを持ってきたのは、この国——メリフィア城塞王国の王女、アルマリア・スルト・メリフィアだ。

「やだ、グンジ様またその口調！ 堅いからやめてくださいと言ったじゃないですか」

「しかし……」

「そうねえ。命令よ、皆と接するように私と接しなさい」

「……わかった」

「それにしてもグンジ様、連日稽古と魔法の習得に勤しむのはいいけれど、たまには休まれては？」

「いや、そうも言っではいられない」

「やはり、ハルキ様ですか？ 彼の判断の良し悪しは一概には決められません、こちらのことも学ばずに飛び出されたのでは、そんなに早く力は付けられないかと」

「それが、あいつの怖いとき。あいつは今ごろ、独学にしる師を仰いだにしろ、剣も魔法も使えるレベルにはあるはずだ。一週間で、あいつはどんな状況にも対応きる。まるで、初めからそこにいたように」

「適応能力が素晴らしいんですね」

「慣れが早いんだとよ」

「ぶええくしょっ!」

「集中せんか、馬鹿者!」

「いでっ」

どす、と分厚い本で叩かれ、金髪に琥珀色の目を持つ彼は、後ろに立つ師匠を恨めしげに見上げた。胡座をかいているからそうなるが、彼の師匠とて女性。立ち上がれば見下ろせた。彼女は赤髪に蒼い目、肌は健康的に小麦色に焼けている。年は二十代後半くらいに見える。背は百七十センチと女性にしては少し高い。引き締まった体軀は、彼女の第一印象をスレンダーと位置付ける。

「よいか、ハルキ。お前の体に宿る風を操作できん限り、ワシはお前に、魔法も、剣も教えんからな」

「なーもー、わーってら。俺だつて、あいつらに遅れはとりたくねえからな」

「しゃべる暇があるなら集中!」

「理不尽!? いでっ」

二度本で殴られる。しかし彼は掴みかけていた。内なる力、その根元たる他者にして自己の存在を。

「《氷柱千本》^{こりゅうせんぽん}」

唱えると同時に、三つの魔方陣が白いローブを着た晴の周りに展開する。一つは、大気中の気体、水蒸気を一気に固体、つまり氷へ昇華させる陣。また一つは、それを細い針に形成する陣。そして最後は、任意に魔力を流すことで効果を発揮し、今それは生み出した氷の針にベクトルを与えるもの。

そして、千の氷柱が最後の魔方陣に流された魔力により方向性を持ち、一体のダミー人形に全て命中する。

「《氷華》」

次に、ダミーに対して魔方陣二つが敷かれる。先に発動したのは、先の氷を溶かすもの。そして次に発動したのは、ダミーを浸す水を

凍らせるもの。しかし、ただ凍らせるだけではない。足元から、美しく儚い。氷の花が咲くのだ。全身を氷漬けにされたダミーへ、晴は一言、冷酷に呟く。

「散れ」

パアン、と涼しい音が響く。あとに残ったのは、溶けるのを待つ氷解だけであつた。

術式発動の速さ、その行程、威力、美しさ。どれをとっても満点と呼べる演習に、同席したものは皆静かに拍手を送る。そんな中近づく、一人の老人。剥げた頭とは裏腹に白い髭は長く、シワだらけの顔、焦げ茶のローブを来ている。とこぞの誰かさんと同じく常に笑顔のため、好好爺（じいじ）の印象が強い。

「晴ちゃんの才はやはり目を見張るのう。一週間でオリジナルを作り出すとは。異世界に魔法があるとは聞かんだが？」

「どちらかといえば、こういう物の変化についての学問があるんですよ。それは、物理学とか化学っていう学問なんですけど、その知識を応用してるだけです」

純粋な感動と称賛を込めた一言。晴はそれに丁寧答えた。

「なるほどのう。じゃがしかし、晴ちゃんや。君は保有魔力も、扱える系統も豊富じゃ。これは才と呼ばずしてなんと呼ぶかえ？」

「んーと、まあそこは置いときましようよ」

ふふ、と静かに笑う。

彼らは今、着実に力を蓄えつつあつた。全ては、来る決戦のため。そして、また三人が笑顔で再開するため。

第六話 魔法とは

彼は今、戦っている。その相手は、風を纏いし虎。西方を護りし神。名は――

「白虎！」

「んだよ、っせーな。もうちょい寝かせえやハゲ！」

「は……俺のどこがハゲじゃ！ 見てみる、この金髪！ 俺はまだピチピチの十、六、歳！ もうちょいで十七だけど、まだ十代だし！」

「あー、わかったわかった。んで？ 話って？」

「力を、貸してほしい」

「あーうん、ちょい待てや」

言って白虎は、この一面真っ白の空間のどこから紙を取りだし、爪先で何かを書いて彼――春樹に渡した。そこには、でかでかと「力」と書いてある。

「そーこれこれ、これが欲し――いわけあるかアホ！ 俺が欲しいのは白虎、お前のその強大な力だつて」

「んー、まあ合格なんじゃね？ ノリツッコミできるし」

「判定基準変じゃね！」

「つー話はともかく、三日三晩ずっと、ハルキは自分の精神世界漂ってきたんだろう？ どうだった、自分の心つてえやつ」

そう、春樹は今まで、ずっと彼自信の心の中をさ迷ってきていた。どれだけ歩いたかもわからないほどに。最初に降り立ったのは、陰湿で薄暗い森の中。そこを抜けると、今度氷の世界。歩き進めると氷が溶けて薄くなっていた川の、その氷の膜を破って流され、たどり着いたのは砂漠。そして最後にありついたオアシスの水を飲んだところで、この真っ白な世界に到着と言うわけだ。

「そうだな、一口には言い切れないけど、カオスだった」

「一口に言えるし！ とまあ、そうだろうな。お前は、光も知って

りや闇も知る。熱血も冷血も知っているし、乾きも潤いも知っている。まあある意味、一度にあれを体験して耐え抜いたつてのは、ひとえにお前の精神力だろ。そもそも、あれを越えられないんじゃない俺を御することなぞできないだろうさ」

「じゃあ、ここに着た時点で合格だったと？」

「ああ、そゆこつたな」

「今の試験の意味ない!？」

「ああ、そゆこつたな」

「なんかあつさり流された!」

「ああ、そゆこつたな。やべえこれイントネーションいい!」

「ああ、そゆこつたな」

一人と一匹は、互いの目を見合わせる。

「「やべえキタコレ!」」

ふつ、と意識の戻る感覚が、春樹を襲う。しかし次の瞬間、すぐに体の力が抜ける。が、何か柔らかいものに受け止められる。

「師匠……」

「ご苦労さん。精霊は、なんじゃった？」

「白虎でした」

「ほう、精霊の中でも最上位の神霊、あの白虎か。どうじゃ、かなりのくせ者じゃったろう？」

「ありやあもう、くせ者つて域じゃないっすね」

「それを手中にしたお前もな、ハルキ」

「そこいつちやいますか？」

「ふつ。まあそれより、明日からは本格的に魔法の習得じゃ。気を引き締めておけよ」

「うい……っす」

かくつ、と力をなくして首を横に向ける春樹。三晩の荒行が災いしたか、すぐに眠ってしまったようだ。

「白虎も御する、か。あんた、とうとう夢が叶いそうだよ。あんた

からもらった玄武は、そのためだからね」

彼女は確信していた。そう遠くない未来、残りの四獣が現れると。そしてそれは、より大きな力を持つてして、この闇に侵食された世界を照らすと。

「さ、まずは魔法がどういうものかについてかの」

「お願いします」

胡座をかいて対面する二人。その部屋は昨日春樹が修行をしていた部屋だ。円形で、少し狭い。蠟燭台を六角形に置き、窓のないその部屋を六つの蠟燭が照らしていた。

「魔法とは、お前の分かりやすいように言えば、主に木火土金水の五行や火、水、土、風の四大属性、いわゆる精霊術のようなもの。

それに光、闇を加えた合計八つの属性がある。ここまでの質問は？」

「一個。なんで師匠は俺たちの世界のことを知ってるんすか？」

確かに、これは不可解だった。多少時代の遅れは感じるものの、春樹のいた世界、つまり地球についての知識がある程度ある。しかし彼女は首を小さく横に振った。

「今気にするべきことではなかるう。なに、時が来れば教えてやらんこともない」

「ういつす」

「では続けるぞ。まず木、火、土、金、水、風は、基礎魔術と呼ばれておる。おおよそ自然に関係するものじゃから、扱いも自然の力を借りれば容易い。そして、光は浄化の役割を多く担うことから聖魔術、闇は暗黒的イメージを持つことから黒魔術と呼ぶのじゃ。まあ、黒魔術は必ずしも悪と言うわけではないが。ちなみに、春樹にはこの中から、使える魔術の全てを習得してもらう。使えるのなら、灯火程度でも火も使わせるし、大洪水を起こしたとしても水を使わせる。その覚悟で挑めよ^{のそ}」

「ういつす。異議なし」

「うむ、言い心がけじゃ。次に魔力に関してじゃ。これは魔法の発

動には必要不可欠なもので、この世の生けとし生けるもの全てに宿る。人もそうじゃが、動物はもちろん、植物、場合によっては石にも宿る。石に生命が宿るとは思えんが、まあ、それはこの際無視じゃ。そして魔法を使うにはこれの操作が必要で、より高位の魔法を使うにはこれをいかにうまく操るかが要点じゃ。

さらに、この魔力にはそれぞれ絶対値が存在し、それを越えられる者はそうはおらん。千年に一人、とも言われとる。まあ春樹の場合、最初から魔力がその体という器に収まりきらず溢れだしたるからう。心配はいらんかろう」

「んー、それを抑える術も身に付けないとなあ」

「春樹の目的は、いかに敵の背後をとるか、じゃからな。まあある程度魔法を使えるようになったら、また教えてやらんこともない」

「ういっす。魔法って、大体そんな感じっすか？」

「じゃな。まあ春樹のことじゃ、今の理屈をある程度納得して聞けたなら習得はすぐじゃろ」

「俺のキーワードは納得、ですからね」

「よし、それでは早速始めるぞ」

「ういっす！」

気合いを入れて立ち上がる春樹と師匠。しかし彼らは後に後悔することになる。今ここで、すぐに魔力の気配を消す術を習得しなかったことに。

第七話 実質勇者 ぐんじ は まほう を つかえるように なった！

魔法の説明を一通り受けた軍侍は、早速魔法の練習を始めることにした。とは言え彼は剣を主体に戦う上、魔力の保有量は平均よりやや下回っている。そのため、火球や氷塊等ファイア アイスと言った下級魔法を重点的に、詠唱を省略して発動できるようにという訓練メニューを組まれた。

「火を司りし精霊たちよ、私の願いを聞き入れたまえ。我が望むは烈火の球。燃えよ、《火球》ファイア！」

軍侍が唱え始めると彼の突き出した左手に火の粉が集まり、詠唱が終盤に差し掛かると火の玉を形成する。そして技を唱えると同時に、それが目前10メートル先のダミーに飛び、直撃、爆ぜる。

「ふむ、普通じゃな」

「老師」

軍侍の成果を見、斜め後ろから声をかける老人。それは先日、晴を褒め称えていた彼だ。彼は自分のことをゲンリュウと呼べと言ったが、軍侍は老師、晴はおじいちゃんと呼んでいる。もともと、ゲンリュウもまんざらではないようだ。

「まあ下級魔法とは言えほんの三十分足らずで習得できるのは、並みよりは早いかのう。ま、晴ちゃんには敵わんがな」

ふおっふおっふお、と笑うこの好好爺は、どうしても憎めない。恐らく、今のは嫌みではなく単なる親バカならぬ弟子バカ発言にすぎないというものもあるからだろう。

「九重は器用ですから。確か彼女、上級魔法も徐々に手をつけてるんでしたっけ？」

「そうじゃよ。それに、中級までであれば黒魔術を除いて全て“使いこなして”おる。あれはもはや、天才というものじゃろ」

「老師の弟子バカぶりと春樹ののろけ、いったいどっちが重いんだか……」

今この場にはいない彼の無二の友を思い出し、眉を潜める。

（春樹か……。そろそろ二週間は経つが、どうしてんだろうな）

どこにいても知らない。しかし軍侍は、彼が今でも生きていて、そしてこの世界に適応しているであろう姿をありありと思い浮かべることができていた。

（信頼、か）

「さ、軍侍ちゃんや」

「その「軍侍ちゃん」って、やめてもらえませんか？」

「修行の続きじゃ」

「訂正できないんすね」

軍侍は、この天真爛漫な好好爺に対し、ため息という些細な抵抗をするより他はなかった。

「「ゴブリン退治？」」

「はい。グンジ様とハルの力試し、といったところでしょうか。国王直々の討伐令です」

ここは中庭。整理された芝生と木々、そして噴水の音が心を落ち着かせる。その側で円卓を囲んで紅茶を飲みながら、アルマリアが二人にそう話した。

「マリア、その、ゴブリンってどんなの？」

「えっと、背丈は大体2メートル、体色は黄緑から深緑、主に棍棒を使った集団戦をするわ。群れはおよそ三百、洞窟や岩場を住み処にするの。そして最大の特徴は、その怪力ね」

「魔法は使うのか？」

「いいえ。彼らは確かに魔力を有していますが、その使い方はおろか、存在も知りません」

「低知能、というわけか」

「ええ。おおよそ犬と変わりありません。強いて言うなら、群れを意識する本能が非常に強く、また指導者の命令には絶対服従です」

「捨て駒にされても、か」

「はい。そこが、彼らを倒すときの唯一の恐怖です」

「で、パーティー編成は？」

「はい、不足の事態に備え、私が同行します」

「マリアが？」

そこに疑問を抱いたのは晴だった。実際、彼女はほぼ常に軍侍にベツタリなので、晴が彼女と会い、話すとしてもなんでもない世間話ばかりだ。しかしそこを、軍侍が補足する。

「マリアも剣の腕はある。魔法もほぼ全体的に使えるからな」

「まあ、晴みたいになんかではないんだけどね」

「けどそれなら、助かるね。いついくの？」

「一週間後ってことになってるわ」

「よし、じゃあ俺はそれまでに魔法を使いこなせるようになっておくか」

「私は今使える魔法、しっかり堅めとくね」

「ではまた一週間後に」

「ああ」「うん」

ズバツ。黄緑をした人に似た巨体が袈裟に斬られ、倒れる。血を払い、刀を鞘に納める。

「流石グンジ様！　ゴブリン程度なら、十匹が集団でも引けを取らないですね！」

興奮して配置から足早に近づくアルマリアと、銀の杖を振るって転がるゴブリンたちを土に変える晴。浄化魔法《灯籠流し》。晴のオリジナル魔法にして、昨日編み出したばかりのものだ。本来闇を浄化する光の魔法、その対象を闇から生命を奪われたものに変換したものであり、命を刈り取った者の、せめてもの弔いだ。

「マリア、ここは戦場だ。もう少し気を引き締めてくれ」

「はい」

少し落ち込み気味に返すアルマリア。そのやり取りを終えたところに、晴がやって来る。

「この先に生体反応がいつぱいあるよ。多分、ゴブリンの巣窟だと思っ」

「探知魔法を使ったの？」

「うん。下級だからあんまり精度はよくないんだけどね」

「えー、私はそもそも使えないから、使える時点で羨ましいよ」

皮肉のない純粋な称賛。どうにも魔法使いと言っのは、魔法に関しては皮肉を言わないらしい。

（いや、決めつけるにはまだ早計か）

実際軍侍はまだ多くの魔法使いとの関わりはない。そう考えを打ち消し、緊張状態を取り戻す。

「進むぞ」

「はい！」「おっけー」

軍侍、晴、アルマリアは、今苦戦を強いられていた。否、戦力的には、まだ分がある。軍侍とアルマリアが前衛で剣を振るい、晴が魔法でバックアップ。この陣形は崩されない。しかし、そろそろゴブリンの巣窟の前に来てから、百は倒している。それにも関わらず、彼らは一向に退かない。それどころか、仲間が倒されても無関係、この三人をなんとしても倒そうとしていた。そのため軍侍の魔力は残りわずか、アルマリアは元々の体力不足が祟って動きが鈍り、晴も精神的消耗が激しかった。

「九重！ 巣窟の奥はどうなってる！？ こっちで防ぐから、少し見てくれ！」

「わかった！」

少し怒鳴り口調になっている軍侍に、晴も声を荒げて応える。それだけ、精神的に追い詰められていた。彼女は無詠唱で探知魔法《ブリーゼ微風》を使う。風の精霊と視覚を同調して、探りたいところにそよ風と言う形で精霊を送り込む魔法だ。そして、最悪の結果に目を見張った。

「なにこれ……！」

「どうしたの？」

表情を歪めながらも、声だけは一番落ち着いているアルマリアが訊く。

「巢の奥に、禍々しい何かがあつて、そこから大量のゴブリンが出てきてる」

「悪魔型ゴブリン！？」

「悪魔型？　なにか変わるのかっ」

言いながら、たまたま軍侍と背中を会わせる形になり、彼は目の前に集中しながら尋ねた。

「本来のゴブリンは、魔物型と言って一週間前に説明した特徴を有しています。けれど、悪魔型は魔王の魔力に影響された突然変異種で、ゴブリンの特徴に付け加えてかなりタフ、そして黒魔術を使います」

「もしかしてそいつらが混じったことで、まだ群れは余裕だと勘違いしたのか」

「普通はあり得ませんが、悪魔型なら魔物型をそう操れても不思議はないです」

苦虫を噛み潰したような顔をする軍侍。晴の言葉通りなら、いくらやっても決着^{けり}がつかないからだ。

（くっそ。どうしたらいい。どうすれば、いい！）

目を忙しなく動かしながら、軍侍は、打開策を編み出そうとして、編み出しきれていなかった。

第八話 謎の旅人

（くっそ。どうしたらいい。どうすれば、いい！）

打開策の出せない軍侍を前に、困惑しはじめたアルマリア。それを敏感に感じ取ったゴブリンが、彼女に襲いかかる。アルマリアは、一瞬の困惑で対応しきれない。軍侍は、気づいていない。晴の魔法では、吹き飛ばすゴブリンもろとも彼らを巻き込みかねない。そういう立ち位置なのだ。

「きゃっ」「マリア！」

「なっ」

軍侍が気づいた頃には、もう遅い。体勢を低くし、アルマリアへその棍棒を逆袈裟に構えるゴブリン。誰もが、宙を舞う彼女を想像した。

「いやあああああ！」

ザザザザッ。

しかし、その予想は、無数の肉を切る音に掻き消された。不意に、体を血だらけにして倒れるゴブリン。その周りには、無数の青い葉が散らばっていた。

「誰だ？」

その問いに、返る言葉はない。その代わりなのか、徐々に彼らを囲み始めたゴブリンたちの頭上から、無数の葉がヒラヒラ舞い落ちる。

「《木の葉崩し》」

葉がゴブリンのすぐ上まで落ちたとき、低く押し殺した声がそう唱えた。

ズザザザザザ

「「キエエエエエ！」「」」

舞い落ちた葉に、浅くではあるが体を切り刻まれたゴブリンたち。苦痛の悲鳴と怒りの怒声が混じった声で一斉に叫ぶと、その魔法を

使った相手を全員がにらむ。それにつられて三人も視線を向けると、太めの木の幹に片膝をついて座り、焦げ茶の擦りきれたマントのフードと、狐の仮面で身を隠した“誰か”がいた。声からして男だろうと推測される。

「ゴブリン風情が、俺に勝てるかな？」

また、あの低い声。そして、仮面の奥では嘲笑した雰囲気があった。ゴブリンに人の言葉を解す知能はない。しかし、彼の出す雰囲気が自分達を馬鹿にしていることはわかったらしい。誰かが叫んだ。それを合図に、彼らは一塊になってマントの男の下へ走る。

「そう。それでいい。《砲台設置》」

彼がそう言うのと、ゴブリンの足元を白い円が囲み、魔方陣を描く。するとゴブリンたちの足が急に地面に沈み、足を取られて動けなくなる。液化化現象と同じ現象だ。

「《打ち上げ》」

そう唱えると地面が切り取られ、彼らは天高く舞い上がる。しかし、男の攻撃はまだ続く。

「咲き誇れ、《紅蓮大輪》ファイアフラワー」

その言葉と共に、舞い上がったはずのゴブリンが、まるで花火のように、爆音と色とりどりの炎で爆ぜた。

「すごい……」

晴が、ただただ感動してため息を漏らす。それほどまでに、この魔法は、精度、殺傷性、そして美しさがあった。

「だが、惨いな。何も内側から爆発させんでもいいだろう」

「いや、内側ではない」

今度は男の反対方向から、女性の声がした。振り向けば、男と同じマント、同じ仮面をしていて、唯一の違いは胸の膨らみと体格くらいだ。

「原理的には、まず弱めの魔法で対象の注意を集め、挑発する。そして寄ってきたところで、あらかじめ固めておいた地面の下に空洞を作って水を引き込み、その範囲に対象が入ったところで土の魔法

《地揺らし》^{クエイク}を使って液状化現象起こす。

まずこれで対象を動けなくしたところで、土の防御魔法《土盾》^{ワイルドガード}の応用で地面を切り離し、風の魔法《竜巻》^{トルネード}の上位昇華魔法《不可視の竜巻》^{インビシブルトルネード}で巻き上げる。そして、まあここからは、頭の堅い王国のやつらには言っても無駄か」

女はそこで言葉を止め、男の方へ歩み寄る。二人は何事か話しているようだが、声が小さくて聞こえない。そしてその話が終わったのだろう。女の方が頷き、三人を見る。

「ワシ……ごほん、私たちはこの巢窟の後片付けをする。お前たちはもう帰れ」

「なっ！ この私に命令をするなど、あなた、何様ですか！ そもそもあなたたちは——」

「私はシヴァ。で、こっちがロキだ」

アルマリアの言葉を割って、女が名乗る。しかし軍侍は、その名が偽名であることを目敏く感じとる。

「シヴァ、ロキ……。北欧神話か」

「好きに想像すればいい。とりあえず、無駄に命を落とされても困る。帰ってもらおうか」

「だから、私に——」

「マリア、よせ。九重の探知によれば、この奥には魔王の息のかかった何かがいる、もしくはあるだろう。今の俺たちでは戦力不足だ。退こう」

「しかしグンジ様……」

「くどいぞ」

「……はい」

「すまん、迷惑をかけた。一応名乗っておこうか。俺は——」

「黒瀬軍侍、九重晴、アルマリア・スルト・メリフィア」

それまで沈黙を守っていたロキが、三人の名を言う。そのことに彼らは些か驚く。

「なぜ、俺らの名を？」

「ちょっと調べればわかる話。アルマリア王女は、勇者が現れるより前にそもそも王女。王女は、有名人。九重晴は、表上の勇者。黒瀬軍侍は、実質の勇者」

三人は、今度こそ絶句した。アルマリアが有名なのは、メリフィア王国とその周辺諸国では常識だからいいとする。しかし晴が勇者として民衆の前に姿を表すのは一週間後の予定、そして軍侍に至っては、今のところ名前はおろか顔を出す予定もない。それなのに、彼はその素性を知っているのだから、それは致し方ないことだった。「身の回りのことは、しっかり把握するべき」

ロキに指摘され、苦虫を噛み潰したように顔をしかめるのは、アルマリアではなく軍侍だった。

「少し前、旅立ったが……俺の友人にも、あんたみたいに耳敏いやつがいたよ。あんたと話していると、あいつを思い出してしまつてなんとも言えん」

「そうか」

ふっ、と仮面の奥で笑った気がした。気のせいかもしれないが。

「マリア、九重、行こう。いらん世話をかけたな」

「気にするな」

軍侍とロキが言葉を交わす。そして、軍侍たちは来た道を、ロキたちはゴブリンの巣窟へ、それぞれ歩み出すのだった。

第八話 謎の旅人（後書き）

教えて！ 春樹センセイ

どーも、どもども、ちわーす、ちよりーっす。

皆のお兄ちゃん、春樹だよ！

いやね、何でこんなところにいるかってえと、だ

作：なあ春樹ー。予定より早く例の企画を始動しなきゃなんねんけど

春：知るかよww 大体あの人、まだ正式には登場してないじゃん

作：うん、だからお前がやれ

春：は？ やーわ。なんでんなめんどく

作：やれ

春：……ハイ

今に至ります。

キャラって立場弱いよね！ 全部作者の意のままだもんね！

ほんとやになっちゃう！

茶番は置いといて。

今回あの謎の旅人、ロキの使った魔法。そのフィニッシュが気になる人って多いんじゃないかな？

あれ、実は闇の魔法、黒魔術なのだ！

まあ黒魔術についての詳しい定義は俺も知らないけど、それで体を分子レベルに分解、同じ元素を寄せ集め、火の魔法で爆発させたってのがその真相なんだZE

物質っていうのは、普段俺たちがよく見る赤い炎で燃烧するものだけじゃないっていうのを利用してみたいだね。

だからこそシヴァって人は説明をしなかったんだろうね。

それはともかくとして。

晴に会いたいよ！

ねえ今からでも戻れないかな！

カッコつけて飛び出したけど戻れないかな！

せめて俺が晴と会うシーン作れないかな！

よし、今度作者に直談判しよ。

第九話 お披露目と騒動、そして旅人（前編）

あれから一週間、軍侍、晴はさらに力をつけた。目の前に、突如現れた旅人に感化されたのだろ。彼の魔法は、あらかじめ緻密に計算された奇襲性^{トラップ}、それに誘導する手順、そして、捕らえた対象を一網打尽に叩きのめす、確実な殺傷性。奇襲とは、一度ばれると同じ手は使えない。あれは少々派手である上に魔法としての効率も、かなり広範囲に及ぶため、悪い。しかしながらそれを補って余りある確実性は、実のところアルマリアも悔しがるほどにすばらしかった。

アルマリアは剣の腕もさることながら、魔法に置いても超の付く一流だ。その彼女が「あんな燃費の悪すぎる待ち伏せは非常識です！ しかも、それをしてなお消耗した様子のない彼は、才の横暴です！ とはいえ、あの流れるような手順は……認めたくはありませんが」などなど、愚痴るだけ愚痴ってからは、一応誉めていた。

閑話休題。

つまりそんな魔法使いの彼に追い付き追い越せの勢いで、二人は修練に修練を重ねた。その結果、軍侍は下級魔法なら無詠唱で本来の力を発揮させ、晴は中級魔法までを詠唱省略、上級は長々とした詠唱が要るが、全て扱えるようになった。もちろん闇を除いて、だが。

そんなこんなで、召喚されてから一ヶ月。晴も立派な術師となり、軍侍も、公開されないとは言え立派に勇者として働けるまでになった。そこでそろそろ魔王討伐に向かうに当たり宣誓でもした方がいいんじゃない？ となり、お披露目となった。もちろん、前に立つのは晴。軍侍は、裏で不足の事態に備え待機している。

「私^{わたくし}、ハル・ココノエは、王国のため、国民のため、そして勇者として、世の人々を苦しませる魔物と、その頂点に座す魔王を必ず討ち取り、この世界に再び平和を取り戻すことを、ここに誓います」

うおおおおお！！

晴の宣誓が終わると同時に、王城前広場に集まっていた聴衆が一斉に歓喜の声をあげる。ようやくこの、いつ来るともわからない侵略の恐怖から解放される、そういつた期待の歓声だ。

「勇者、ココノエよ。その誓い、このメリフィア王国国王、シュバル・サラマンド・メリフィアがしかと聞き届けた。生憎我が国も勇者のお供を出せるほど人員が豊富ではなく、その旅路は極めて困難を極めようぞ。しかし、この日のために鍛えた己の技を信じ、迷わず突き進むことを我は望む」

「はっ、王の期待、民の期待に添えられるよう、このココノエ、命果てるまで尽力する所存にございます」

晴が言った、その時。

「ぐはぁ！」

ザシュ、という音と共に、広場のステージを守っていた一人の兵士に矢が刺さる。

「敵襲、敵襲だぁ！」

誰かが、叫んだ。

「魔物だわ！」

誰かが、恐怖した。

「に、逃げろお！」

その声で、広場が一斉にパニックに陥った。我先に逃げ出す者、物陰に隠れようとする者、もみくちゃにされ、離れた連れを探す者、この広場に集まった、一万を超える国民の統制は、もはや取れなくなっていた。

「落ち着け、落ち着かんか！」

シュバル国王の声も、今の彼らには聞こえない。

「国王、敵の狙いは、この騒ぎに乗じて私を殺すことだと思います。お願いします、特例で、精神干渉を」

精神干渉魔法。相手の真相心理に入り込み、感情を操作し、意のままに操る魔法。その危険性の高さから、ほとんどの国では使用を

禁止されている。ここでもそれは同じ。しかし、この騒ぎで場の統制が取れなくなるよりは、落ち着かせる意味でそれを使うのはある意味最善の策だ。そしてこの、シュバルという人間は、それがわからない馬鹿ではなかった。

「くっ、やむを得ん。その申し出、このシュバルの名の下許可しようぞ」

「有り難うございます！ 風の精霊よ、光の精霊よ、私の願いを聞き入れたまえ。我が望むは心の安らぎ。爽やかな微風、穏やかな陽光を持って、人々に癒しを与えたまえ。《安らぎの空間》^{レストフルワールド}！」

晴が唱えると、この広場を埋め尽くして余りある魔方阵が展開する。それが柔らかな白光を放ち、パニックに陥る人々を優しく包んだ。

「なんだ、これは……？」「心が洗われるようだ」

その効果は、すぐに現れる。精神干渉魔法《安らぎの空間》。人の心に直接干渉し、春の野原に吹く心地よい風と、そこを照らす穏やかで暖かい日差しを受けているような錯覚に陥らせる。そしてぼんやりとしはじめた対象に、効率よく指示を出すという精神干渉魔法だ。これでも一応、聖魔法の類いにはいる。

「皆、よく聞け。各々、混乱を起こすことなく、直ちに自らの家へ帰宅しろ」

頃合いを見計り、シュバル国王が指示を出す。すると聴衆は、まるで操られるかのように帰路に付く。

「収まったか」

「恐らく敵は、強行手段をとるだろう」

シュバル国王の呟きに答えたのは、脇から出てきた軍侍だ。一見真っ黒な道着を来ているようでラフに見えるが、腕にはしっかり小手をはめており、その左手に握られた刀の柄を、右手でしっかりと握っている。臨戦態勢を取っているようだ。

「ふむ、安心はできぬな」

「まったくだ。強襲犯は、^{テロリスト}いざとなれば自爆もする。捨て身ほど怖

「いものはない」

「さて、どしたものが――」

カン、と彼の言葉を遮り、金属音が響く。気づけば、シュバル国王の後方にいた軍侍がいつの間にか前に出て、その左手を肘を折って拳げている。カランカラン、と乾いた音が、軍侍の足元に響いた。

「これは、吹き矢か。やつらの狙いは――やはり九重か」

普通、国王が狙われたと思うだろう。しかし彼は風の流れがわからないほど鈍感ではない。むしろ、そういうものに敏い。シュバル国王の右ななめ前に、晴がいる。そして軍侍からして、風は左に向いている。僅かな差で、風に流されたのだ。

「九重、すぐに逃げろ！」

「わかったっ」

駆け出す晴。ちょうど、軍侍とすれ違おうとした、その時だ。

サササッ。

小さな足音と共に、軍侍、晴、シュバル国王が十数人の黒づくめに囲まれる。

「要人警護か……。もつとも苦手だな」

まして、これでは晴もおち魔法を使えない。晴自身、風と火の下級魔法で身体強化をして戦えるが、恐らく彼らは、その手のプロ。ろくに太刀打ちできそうもない。

「俺がやるしか、ないんだな」

軍侍は決め、刀を抜く。

（できるか？ こいつら、俺の隙を付くぞ。否、ネガティブになるな。九重は護身程度できるにせよ、国王はまずい。国王中心に防戦か。骨が折れるな。まあ……）

思いつつ、彼は笑っていた。なんとなく、誰かさんに似た気配を感じ取っていたからかもしれない。

第十話 お披露目と騒動、そして旅人（後編）

（骨が折れるな。まあ……）

ニイ、と笑う軍侍。一步詰め寄る黒づくめ。両者が牽制し合う中、それは突如、降って湧いた

フリーゼアーマー
「《風鎧》」

上空から、耳をすませなければ聞こえない声が詠唱する。黒づくめの誰かが、気づいた。軍侍もまた、気づいていた。

バキッ。関節を砕く音に軍侍が振り向くと、突如として現れたマントと仮面の男——ロキが、黒づくめの一人の首を両手で挟んで捻りながら、首だけを後ろに傾かせていた。そして、力なく倒れる黒づくめ。

「よっ」

「よっ」

軍侍とロキが、短く挨拶を交わす。

「ここは俺に任せる。二人を連れて、早く」

「すまん」

言って、軍侍が走り出す。その道を阻むものは、ロキが横合いから蹴り飛ばす。

「すぐ来る!」

「ああ」

短いやり取りで、互いの意思を疎通する。そして、追おうとした集団を、空中で姿勢を変えて迎撃する。

「おっとあ、お前らの相手は、この俺だぜ?」

不意にトーンの上がる、ロキの声。その愉快犯じみた声に圧倒され、警戒し、黒づくめはロキを囲った。

「早く来いよ、軍侍。俺、集団戦苦手なんだから」

その声には、どこか昔を懐かしむ趣があった。そう、まるで剛腕と柔脚を思い出しているような。

「シュバル王、すぐに避難しましょう」

「彼は味方なのか？」

「現状、こちら側についています。前にも一度助けられました」

「ふむ、今はそれを詮索する時間はない、か。やむを得まい、彼に頼り、ここは退こう、ぞ」

そうやり取りし、走り出す軍侍、晴、シュバル王。城の前の警護を顔パスし、中に入る。と、そこに一人の好々爺が出迎えてくれた。

「老師」「おじいちゃん」

そう、ゲンリユウだ。彼は糸のように細い目を一層細め、ほくそ笑む。

「ロキといったか、彼は面白いのう。自らの魔力を消そうともせん。あれでは、わしのような者に正体をさらけ出しとるようなもんじゃ」

「ロキの、正体？」

そこに食いついたのは、晴だ。

「晴ちゃんは薄々感づいとるようじゃな。彼の魔力、量、質から察するに、きつと——」

「それ以上は、機密事項じゃ」

突如、またしても声が降って湧いた。その女は、スレンダーな体格、小麦色の健康駅な肌、歳は二十代後半に見える。晴のように目は大きいが少し吊り目がち。しかし威圧的な印象は受けない。赤髪をポニーテールでまとめ、顔だちも整っており、一言で言うならマリンスポーツの女王といったところだ。

「歴史を紡ぐ者、マリス・ウエンディ、か」

「その呼び名はやめると、言わなかったか？」

シュバル王の呟きに、マリスは顔をしかめる。

「そういえば嫌っていたな。ふむ、すまん」

「わかればよいのじゃ。それよりあいつ、ロキのことは詮索せんでやってくれ。本人の強い希望じゃ」

「ロキとは、なにか繋がりが？」

彼のことを詳しく知っていると見て、軍侍が問う。

「なに、師弟の関係と言うだけじゃ。これ以上は、ちと話したくない事情もあるかの」

「なるほど、秘密主義か。まあ事情があるなら、深くは聞かない方がいいか。ところで、あんたはシヴァだろ？」

いくら秘密主義と言えど、これだけは答えてもらおう、という目を向けて軍侍がマリスに訊く。

「そうじゃな。実際、わしは隠そうとせんだしのう。さて、ゲン爺。わしは本来お主に用があつてきたのじゃ。ちと場所を移すぞ。それから軍侍、主は早くロキのところへ行つてやれ。あいつは集団戦は基本苦手じゃからな」

「わかった」

言つて、軍侍は外へ、晴、マリス、シュバル王、ゲンリュウは城の中へと、それぞれ移動した。

「なんなんだ、こいつら」

ロキは、変わらず低い声で呟く。状況は、芳しくない。そう考える間に横合いからの蹴りが入るが、ロキは少し屈んで避け、そのまゝ相手の顎を蹴り上げた。そうすることで消える黒づくめ。そう、彼らには実体がないのだ。彼の得意魔法、風の力で作り上げた鎧のお陰で飛び道具は効かない。だから実質的にロキの負うダメージはゼロ。しかし実態がない上に――

「くっ、またか」

黒服の隙間に、蠢く影が侵入する。そして、二度立ち上がる倒したはずの黒づくめ。そう、彼らは倒しても倒してもこうやって再生するため、きりががないのだ。そこに苛立ち、いい加減ロキは精神的な消耗が激しくなってきた。その時。

「キエエエエ！」

初めて、黒づくめが声を、それも悲鳴――どちらかと言えば断末

魔——をあげた。その声に口キが振り向くと、そこには軍事が刀を降りきった状態で構えていた。

「遅いぞ、黒瀬」

「わるい、ちよつと話が立て込んだ」

ニヤリと笑う軍事と、仮面の奥で同じ笑みを浮かべる口キ。

「こいつらどうやっても倒れない。どうやって倒した？」

「胸の中心辺りで手応えがあつた。どうやらその辺がコアらしい」
「なるほどな。《ウインド・カッター鎌鼬》」

軍事の意図を把握し、風の魔法、斬撃系の呪文を足に集中して唱える。主に風を圧縮して不可視の刃を作る魔法だが、それを体に唱えることでナイフ人間を作る使い方だ。

「さて、反撃開始と行こうか」

背中合わせになった二人は、覇気と狂気を孕み、笑みを浮かべた。

第十一話 旅立ち

「さて、反撃開始と行こうか」

背中合わせの嗤う二人。駆け出すのは、同時だ。ロキが右足を蹴り上げて黒づくめの胸を切り裂き、返しの手（この場合脚とも言える）で隣にいた黒づくめも倒す。

（要領わかりや、こっちのもんだぜ！）

ロキの素のしゃべり方を、声に出さず心中で呟く。

一方軍司は、横一閃に薙いで一気に二人の黒づくめを倒し、そこから返して袈裟斬りで一人、さらに踏み込んで逆袈裟で一人を倒す。そこで背後に気配を感じ、無詠唱で左手から誘導系の火炎球を飛ばす。その黒づくめが倒れると、奥からロキがミドルキックを振りきった姿勢で現れる。

「流石」

「そっちこそ」

軍司、ロキの順に、軽い称賛をしあう。二人に余裕があると言う合図であり、軍事にとっては懐かしくすら感じる。

「行方不明の親友がいてな」

再び背中合わせになったところで、軍司がポツリと呟く。

「柊春樹、勇者として誤転送されたか、それが勇者かはいまだ不明だが、召喚された三人のうちの一人」

「ああ。そいつに似てんだよ」

「そりやどうも」

「こうやって会話できる辺りが、な」

突きで迫る黒づくめの急所を的確に砕きながら言い切る軍司。

「気のせい、だろ」

ハイキックで黒づくめを倒し、戻した足をそのまま軸にして回転蹴り。一気に二体を沈めたロキの横合いから、下段に構えた軍司が飛び出し、逆袈裟、袈裟で残りの二体を倒し、黒づくめ軍団は完全

に撃沈した。

「ロキと名乗る青年は不在、か」

ここはシュバル王の執務室。そして彼は、執務用の黒革の質素な椅子に深く凭れて漏らす。

「はい。あのあとマリスさんが来て、足早に帰っていきました」

「旅立った、が正確じゃない？」

軍司の言を、左にいる晴が補足する。確かにこれまでの話からすると、彼らは流浪の民、根無し草というやつだろう。

「ふむ。やつらを退ける実力者と、マリスがおれば、魔王討伐も楽になったのだが、な」

「過ぎたことは仕方ありません。それに、彼らも魔王討伐ではないにしろ、魔王に関係のあることや人々の驚異になるものを倒すために動いているようです。目的が類似しているなら、またどこかで会うでしょう」

「その時はロキの仮面も剥いでやろつと」

軍事の言葉を言外に肯定し、ゲンリュウの言葉を気にしているのだろう、晴がロキの正体を突き止めることを暗示した。

「まあ、その話は置いておきましょう。それよりシュバル王、そろそろ俺たちも外の世界に出るには十分な実力をつけました。王はどう思われますか？」

暗に「いい加減魔王倒させろゴルア」と訴える軍事に、ふうんと息を吐くシュバル王。信頼できるが心配、といった複雑な表情をしている。

「可愛い子には旅をさせよ、か」

「ちよつと違うと思いますけど」

「マジか」

「意外と若い！？」

晴、軍事の順に突っ込まれ、ハッハと一人笑うシュバル王。

「ふむ、そろそろ出陣の時、か。よし、明日には出てもらおう、ぞ。

今日は存分に体を休めるといい」

「有り難うございます。では、失礼します」

軍事が言って二人は一礼し、部屋を後にする。パタン、と響いた音と、彼らが部屋から離れる足音を十分に堪能してから、彼は閉ざした口を開けた。

「というわけだ、マリス」

スタ、と軽い音が着地する。彼の後ろにはマリスがいた。

「ちょうど出そうと思っていたところじゃ。ハルキのやつ、風と闇以外は本当に、下級しか使えんからのう。まったく、困った弟子じやて」

「対策はあるのだろうか？」

「ご丁寧にピアスホールを三つ空けておったからの。火と水と光の召喚獣を持たせておいたわ」

「下手に呪文の要る魔法石ではなく、魔力を流すだけで扱える召喚石、か。確かにあの魔力保有量なら、召喚獣を十体同時に三日間連続使役しても切れることはなからう、ぞ」

「まったく、最初は期待したがまさか風に特化したバカ力だったとはのう」

「……二人を、頼んだ」

「それはやつに言っておけ」

「伝言だ」

「覚えていたらの」

そう言い捨て、マリスは霧散した。感覚同調系幻覚魔法、《影分身》^{ドゥ}だ。

「あの三人は、全員で勇者、か。昔話に聞く勇者は、一体どれ程の化け物だったの、か」

ふう、とため息をこぼして、シュバル王は執務に戻った。

目指す魔王城、途中の村

黒いドレスシャツとパンツ、グレーのベストを着た軍司、白いローブの隙間から見える、赤いミニスカートに黒のアンダーシャツ、軽量の胸当てをした晴は馬に跨がり、見送る国民に手を振っていた。

「なんだかんだで、もう一ヶ月か」

「地味に二人とも、魔王討伐の任を受けたってのは満更じゃないんじゃない？」

「まあ、頼られては無下に断れないのは、俺も春樹も同じだ」

「確かにね」

「まず最終目的は魔王の討伐、目標は魔王の息のかかっているエリア等の、可能な限りの浄化か」

「てことだけど、まずはこの国を抜けた平原の先にあるコルキン村かな」

「特産品は、隣接する鉱山からとれる稀少金属^{レアメタル}、そしてそれを加工した武具か」

「ただ山の中腹にある村だから、それ以外の発展は遅れてるみたいね」

二人は、これから通ると推測される村や町、国の特徴をメモした冊子の内容を思い出しながら語る。そうこうしている内に、国の主要出入り口の一つの北門に到着した。

メリフィア城塞王国、それは名ばかりではなく、この国を囲む、十メートルにもなる壁からもわかる通り国自体が要塞になるのだ。

「この国、規模は小さいが金はあるんだろうな」

「量より質を重視する国なんだ」

「まあ、このことはもう考える必要もないだろう。それより、コルキン村だな」

言つと晴は頷き、地図を懷から取り出す。

「魔王城に向けて北上、つてのはまだいいんだけど」

「まさか、こんなにも離れているとはな」

地図を覗くと、この国と魔王城を結ぶ直線距離だけで軽く四千キロはある、というのが二人の見解だ。それを聞いただけで途方もなく感じるが、加えて山有り谷あり川あり村あり。訪れる先々でのアクシデントも踏まえると相当な時間がかかりそうだ。

「まあ急ぐ旅でもないし、急がば回れと言う。先人の知恵には驚かされるな」

「善は急げ、っていつても今すぐ行くのは得策じゃないしね」

「そういうこった。まあ、ラフにいこう」

「私は春樹に会えればいいかな」

「……そうか」

なにやら目眩を覚えそうになった軍司は、気のせいだと思考を投げ捨てた。

一方、春樹はいええ。

「お主、本当にそんな身なりでよいのか？」

マリスに心配されるほどに、彼は軽装だった。

「まあ、“現地調達”って感じで。なんとかありますよ」

「……変なことにだけは、首を突っ込むでないぞ」

「“わかって”ますよ」

春樹の含みのある言い方に悪寒を感じマリスが忠告するも、彼はするりとかわすようにヘラヘラとした笑みを浮かべる。

「ま、大丈夫つすよ。いざとなれば飛んで逃げますから」

「あれは魔力の消費が激しいことを、理解して使っんじやぞ」

「んなーもう、その辺はきちんと理解できてるし、納得もしてますつて。じゃ、行ってきます！」

「気を付けての！」

と叫んだその声は、暴風と共に飛び立った春樹には届いたのか……。それは、彼にしかわからないことだった。

「やたらと、カラスが北に飛ぶな」

「しかもコルキン村の方角だし。やな予感する……」

馬上の軍司と晴は、空を見上げて呟いた。

「てか、カラスっていたんだな」

「だねー」

なんとなく嫌な予感はあるが、

「あとどれくらいかかるんだろうな」

それは気にしなくて、

「夜にはつくと思うよ？」

それより沈黙が嫌で、

「そういやカラスって、本来は悪いやつじゃないらしい」

ただただ彼は、

「そうなんだー。でもやつぱ、かわいいよね」

普段はしない“他愛もないおしゃべり”に身を投じていた。

豪、と炎がうねりをあげる。焼き尽くされる無数の木造家屋とその熱気、人の焼ける悪臭、呻き声がそこら一体に広がっていた。

そんな中、一人だけポツリと立つ男。興味なさげにたたずむ姿は一見、被害による心的ショックで感情が欠落しているようにも見えた。しかし、違う。彼が立ち去ろうと踏み出した足の軸足を、焼けて倒れた家の壁の下から伸びた手が掴んだ。

「か……えせ……。村、を……返してくれ……」

そう、彼は加害者。魔法でこの村——コルキン村を焼き払い、逃げるものを切り捨てた、極悪非道の犯罪者。

「知ってはいけないこと、知った。大人しく魔王様に従えばよかった。お前ら、馬鹿」

モザイクでもかけたような機械的な声が、下敷きになった彼に告げる。そして足を掴む手を振りほどき、なにもなかったかのように歩み、霞むほどに高速で飛び去って姿を消した。

「なにが……」

「ひどいつ」

軍司と晴は、元コルキン村についていた。しかし今やそこは、焼け野原。人肉の焼けた臭い、微かな煙たさ、そして、なにか黒くて暗い魔法による、事象改編の爪痕のみが残されていた。

「《探索^{サーチ}》」

晴は、唱えるとその場に居るすべての精霊と感覚を同調させる。

この世界には、まれにどの属性にも分類できない魔法があり、それを無属性魔法と呼ぶ。この探索もその一種で、無属性と言うよりは全属性という感じだ。

「これは……黒魔術の名残だ」

「黒魔術……。闇属性の魔法で、炎は使えるのか？」

「うっん、そうじゃない。火の魔法を、闇魔法の負の力を増幅させる魔法で強化したみたい」

「よほど、恨みだとか悲しみだとかが強いやつなんだろうな」

「……誰かわからないけど、同情しちゃいそう」

「こんな極悪非道なやつに情けをかけるな。死ぬぞ」

「……うん、そうだよな」

言って、晴は精霊と繋いだ感覚を閉じた。

「それで、犯人はわかったか？」

「わからなかった。なんだか、それこそ闇の力で姿を霧に包んだみたいに、パツとしなかった」

「なるほどな。俺らが来ることを知ってか、知らずか。できれば、今はまだ会いたくないな」

軍司が、どこかやりきれなさそうに言う。隣で晴は、どうやら場の空気と言うか、臭いと言うか、その辺に当てられて口元をロープで覆っている。

「残念、もう会った」

気の抜けた二人に、フードを深々とかぶり、口はマスクで隠し、だぼっとした服とブーツで身を固めた、おかしな声の彼が、突如目

の前に現れた。

目指す魔王城、途中の村（後書き）

「世界魔法大全」

よう、元気にしとるか？マリスじゃ

さて今回は、闇魔法について説明しようかのう。

闇魔法とは、古来殺傷のみを視野に入れた魔法など、およそ応用の効かせづらい高ランク魔法につけられた名じゃ。

もちろんその用途から忌み嫌われやすいが、使い方を工夫すればなかなか悪くはないぞ。ロキの紅蓮大輪など、いい例じゃな。

そして闇魔法のうちに、負の感情をエネルギーに変換するものがある。これは当然エネルギー保存の法則で、負のエネルギーはその他のエネルギーになることで軽減されるから、ある種のストレス発散じゃな。

そして、このエネルギー変換は、魔力に変換するのが一番無駄がない。そして変換された魔力を他の魔法に付随することで、まあちと禍々しくはなるが、強力な魔法を扱えるわけじゃ。

しっかしまあ、なかなかド派手な焼け方じゃったのう。どれ程負の念があるのか……。

ちなみにこの魔法、使うとちとハイになってしまふ代物でな。この前ハルキに教えてやったら――

「ひひよー、なんらか、すんごくきもちがいいれすよー」

――と骨抜きになっておつて――

春：し、師匠！ それ以上はオフレコで！

おお、すまんすまん

第十三話 VS、モザイク野郎

軍司、晴が目指した最初の村、コルキンは、彼らが着く頃には焼け野原と化していた。闇魔法の名残、人の焼けた臭い、目の前の惨状を哀れとみつめる彼らの前に、その男は現れた。

「残念、もう会った」

「貴様が……これを？」

「イエス」

「何のために」

「すべては魔王の思いのままに」

「ここが何をした」

「知りすぎた」

「何を」

「殺すヨ？」

小首を傾ぐその背後から、急に突風が吹いたような気がした。それは、魔法を扱うもの、また魔力に敏感なものだけがわかる、強力な魔力の具現、魔風と呼ばれるものだ。

「殺る気満々だな」

「魔王の敵は、討つのみ」

その声と共に、男の姿が霞む。暴力的な魔力の量とは裏腹に、魔法発動までの時間、展開する魔方陣の小ささ、必要最低限の魔力を使うそれは、繊細で理想的な魔法だと二人はすぐに気づく。ただの肉体強化、それでも、それは高等なテクニックと殺意を持って、一足で晴の喉笛を潰しに来た。

カン、と硬質な音が響く。騎乗したままの晴——ではなく、男に比べ少し雑だが結果としては同じだけの肉体強化をした軍司が、鞘

に納めたままの刀を盾に攻撃を防いでいた。

「すばしっこいやつめ」

「そっちな」

軍司と男の間で、短いやり取り。軍司は風の魔法で空気を圧縮して足場を作り飛び退き、男は浮いたままバク宙で距離を取る。

「九重、距離をとって援護を頼む」

言って、刀を抜く軍司。切っ先に向けてうねる竜が、夕暮れの朱を反射させる。対する男は、右手を横につき出して虚空をつかむすると、そこに禍々しい黒の刀が、闇を集めて現れた。

「闇の具現か、か？」

「正解」

瞬間、各々の作った足場を蹴り、二人は衝突する。そのまま空へかけ上がりつつ、甲高い金属の打ち合う音を響かせる。

「援護って、そんなに接近してたらできないじゃん……」

一人残された晴は、そうばやくしかできないのだった。

ギン、と打ち合う音が止み、代わりに金属を擦り合う音が鳴る。

二人が鏝迫り合いで睨みあっているのだ。

「なぜお前は魔王に付く。こんな実力を持っているのに」

「真実を、教えてくれた」

「それは戯れ言だっ」

気迫と共に、軍司が圧す。

「あのお方こそ全てっ」

今度は、男が圧して優位に立つ。

「魔王など人を苦しめる邪の象徴と言うことが、なぜわからない！」
軍司の、珍しく荒い声が、力となって男を圧す。

「人は傲慢なだけだ！ 俺は、あのお方に並び、真の邪たる人を滅ぼす！」

男も声を荒げ、軍司を圧してゆく。

「少しは素直に、なりやがれや！」

言って全力を込めた軍司の圧しに、男の足場は崩れ、矢のごとき速さで落下する。しかし、彼もやられたままではない。地に付く前に体勢を直し、同じ速度で軍司に迫る。

「お前には、わからない！」

「なっ……」

瞬間、轟音が轟くと同時に、軍司は地に叩きつけられていた。

「黒瀬くん！」

軍司が向くりと起き上がる。ダメージがほとんどないのは、空いた左手をついている地面が仄かな光に包まれているお陰で容易にわかった。晴が魔法で受け止めてくれたのだ。

「すまん、九重」

「いいって。それより、さっきの反応遅れたのはなんで？」

駆け寄ってきた晴に軍司は謝罪するが、彼女はそれより気になることがあったようだ。

「いや。一瞬動揺してしまったらしい」

「え、黒瀬くんが？」

「おい、その心底意外といわんばかりの声と顔はやめろ」

「あ、バレた？」

「……今は仮にも戦場の真っ只中だぞ」

ため息を漏らす軍司だが、すぐに持ち直す。

「それよりさっきのことだが……。どうにも、やつはなにかに執着しているらしい。それも、深い憎悪だ。それがほんの一瞬見えなかった気がして、遅れた」

「憎悪って……。けどやっていいことと悪いことが――」

「ずいぶん、余裕」

突如、モザイク声が割って入る。声のほうへ振り向こうとした二人はしかし、その前に強烈な風に煽られてやむ無く顔を庇い、視界を遮ってしまった。その隙に。

「きゃっ」

唐突に響いたのは、晴の悲鳴だった。軍司が焦って守りを解くと、

闇色のナイフを晴の首に突きつけ、後ろから拘束しているモザイク声の男がいた。

「九重っ」

「下手に動くな。こいつ、殺すぞ」

「くっ。卑怯な」

「昔から。さあ、お前が死ぬか、こいつが死ぬか、決めろ」

「どついう……意味だ」

「お前が自害をするのなら、こいつ、離す。しないなら、こいつ、殺す」

「だめ、こんな口車に乗らないで！」

「……ちゃんと、離すのか」

「離す」

「信じちゃだめ！ 黒瀬くんが死んだら——」

「九重！ 俺は、春樹と約束した——託されたんだ。お前の命を」

「だからってっ」

それ以上は、言葉にならない。いや、言葉には、できた。しかし軍司の放つ覇気が晴に一点集中したために、彼女は言葉を失ったのだ。

「——どうせ死ぬなら、友のために——」

言って、手にしていた刀の切っ先を、己の首筋にあてがう軍司。

「どうせなら切腹のほうが、味は出ていたか？」

ニヤリ、と彼は笑う。

ザン、と肉を裂く音が、風も吹かない焼け野原に、虚しく響いた。

第十四話 鼻つまみもの

ザン、という肉を切る音。

「ぬ……うっ」

しかし、目をぎゅっと瞑っていた晴に届いたのは、自分を拘束するモザイク声の男の声だった。続いて緩まる腕を縛る力に、おっかなびつくりになりながらも晴はスルリと抜けて目を開けた。目前には、まだ首に刀を宛がう軍司。

「黒瀬くん！」

必死に駆け出し、軍司に近づく晴。名を呼ばれ目を閉じていた軍司も目を開き、状況の変化に鳩豆な表情をしている。しかし、それも一瞬。すぐに刀を右手に持ち、左手で晴の手を引いて自分の背中に回すと、庇うようにその左手を晴の前に出す。

「いったい何が」

「わからない。けど、あの人は確かに何らかのダメージを受けてたよ」

見ると、片膝をついて左肩を抑える男の姿がある。

「誰だ！？」

答えは、ない。しかし返答の代わりに、虚空から唐突に、無数の光る矢が現れ、彼めがけて一直線に飛ぶ。

「魔方陣のない魔法だと……？」

これに驚いたのは、軍司だ。普通、というより絶対に、魔法発動には魔方陣が現れる。特に、虚空からなにかを生み出す場合、魔方陣が現れてから事象に変化を及ぼす。これは言ってみれば、世界に対して「これから自然の摂理を崩しますよ」というサインであり、許可書の申請でもある。それが、魔方陣。だからこそ彼は驚いたのだ。

「それに、魔法発動の名残が感じられない」

今度は晴。魔方陣を仮に隠せたとしても、魔法を使ったことまで

は隠せない。それが、自然の摂理をねじ曲げた爪痕としてくつきり
と残るため、魔力に非常に敏感か、先の晴の魔法のような精霊同調
系を使うと魔法を使ったことはすぐわかる。特に晴は魔力に敏感で
もあるため、そんな彼女が気づけない名残は、ない。

結局その無数の矢は男の魔風に弾き飛ばされたが（強い魔力の塊
は魔法を弾く力がある）、少なくとも二人にとって、そこが問題で
はなかった。

「これは、新手の魔法か……？」

「いんや、新手の魔道具さ」

その質問に、背後から返答が来る。

「お前、誰」

男が、聞く。

「コルキン村の鼻つまみもの、そして生き残り。魔道具専門鍛冶師
とは、このアタイのことだよ！」

バン、と背後にデカデカと書かれそうな雰囲気で自己紹介をする
のは、烈火の如く赤いショートヘアをツンツンに立て、目は普段な
ら爛々と好奇心に満ちているのだろうか、今はその赤い目が怒りを
映し出すよう。胸は晒しを巻き付け、ジーンズ生地のパギーパンツ、
頑丈そうなブーツに革手袋、首にはゴーグルを下げた女性だ。

「一言で言えば、姐さんか」

「おっと、あんたにやそう見えるかい？ アタイはいつでも邪険に
されたから、少し嬉しいね」

「それはどうでもいい。生き残り、出してない」

男が、きつと困惑しているのだろう、肩を抑えたまま動けず、辛
うじてその問いを口から紡ぎ出す。

「ああ、ちょうど最近開発したこの《低燃費魔力原動機付二輪車》
略して魔動二輪の試運転がてら遠くまで行ってたからね。気づかな
くて当然さ」

「これは……バイクか」

もはや毒気を抜かれたのだろう、軍司が彼女の近くに停められた、

その《低燃費魔力原動機付二輪車》略して魔動二輪に興味を示し、観察している。

「ばい……なんだそれは？ まあとりあえず、それは大体ファイア一発分ほどの少ない魔力で、五十キロを時速百キロで進めるっていう、アタイの最新作にして自信作さ。スピード、燃費、両方を欲張りたいた人向けさね」

「なるほど、それでこのフォルムか。ちょうどレーシング用のに似ている。しかも使われている素材も、中々に頑丈だ。これは、すごい」

「おお！ このすごさがわかるか！ お前は天才だ、私の第一の弟子にしてやろう！」

「是非、お願いします！」

「あのー、仮にもここは戦場ですけど？」

「いや、あいつはもはや戦う気などない！ 何せ肩をぶち抜かれている。あの位置なら、痛みも相当だろう」

「……お見通し。ここは、退く。次、ない」

言って、男は虚空に手を突っ込む。するとその手を軸に人一人分がやっとほどの闇の穴が現れる。

「これは、ゴブリンの巣にあったのと……！」

「魔王様の力。……最後、選択肢やる。魔王様につくか、死ぬか」

「どついう、意味……？」

「魔王様、お前、お気に召されたよう。つけば、魔王様創られる、新世界の神の子になれる。……ついて、こい」

「残念だけど断るわ。私には魔王を倒すって目的がある以前に、約束がある。その約束の中に、魔王討伐があるだけ。だから、ついていけない」

「……残念。次会う時、また聞く」

その言葉と、苦い顔の晴を残し、彼は闇に吸い込まれた。そして閉ざされる、空間の裂け目。

「結局、何がどうなったの？」

恐らく十人が十人思うだろう疑問を口にしながら、軍司に同意を求めようと振り向く、と。

「なるほど、回すことでその感応石の触れる面積が――」

「そして調節しつつだな、これをこうしてかくかくしかじか――」
十中八九、かもしれないと気付きため息を漏らす晴だった。

第十四話 鼻つまみもの（後書き）

（世界魔法大全）

よう、マリスじゃ。

今回は《低燃費魔力原動機付二輪車》に搭載された感応石についてじゃ。

これはコルキン村の隠された特産品で、ほんの一部の国のみが買い取っているのじゃ。

魔力を他のエネルギーに変換するという特殊な性質を持っている、というのを利用したのがあの魔動二輪じゃ。

ちなみにこの感応石はもちろん純度があるのじゃが、人の手では理論上純度百パーセントの感応石の精製は不可能とされておる。人の手が入るとどうしても不純物が入ってしまうんじゃな。

それとこれはどうでもいい話じゃが、わしもコレクションでこの感応石を仕組んだ作り物を持つとるんじゃ。形は竜で、魔力を流すと一定時間飛ぶものなんじゃがな。

春樹に貸してやったら――

春：やべえ！竜とんだ！竜とんだ！

――と手に負えんほどにはしゃいだったのう。

男というのは、そこまで竜に憧れてなにがしたいのやら……。

第十五話 純度100%!? 奇跡の感応水晶

「……それにしても、何て言う惨状だい、これは」

目の前に広がる、コルキン村の焼け跡。それを目の前にどこかやるせなさそうに肩を落とす彼女。

「先の男の仕業みたいだな」

「言われずともわかるさ。アタイにや魔法なんて使えないけど、一応魔力を感じることにくらいならできるからね」

「だから、魔道具か」

「ああ、言ってみれば魔法の代用品。魔力を体外に出すことさえできれば誰でも使えるし、そもそも人は魔力を体内に隔離することはできない。アタイは、誰もが使える魔道具を作りたいのさ」

しかしその大きな夢を語る彼女の顔も、今は陰りがある。なぜなら――

「けど、こんな状態じゃ難しくないですか？」

「まあ、幸いにも魔道二輪の座席の下の格納スペースに、必要な工具は積んでるんだ。あとは今まで採取、精製した感応石を見つけ出さないかね……」

「手伝おう」「手伝いますよ」

軍司、晴が口を揃えて申し出る。

「ああ、助かるよ。なんせうちは石造りだったからね。特に男手があるのは嬉しいさね」

「力仕事なら任せろ」

「こっちだよ、ついてきな」

職人の彼女の先導に従い、二人はコルキン村焼け跡へ足を踏み入れた。

「申し訳ございません」

モザイク声の彼が、暗い空間の中、壇上の女性に片膝をついて深

々と頭を下げる。するとそれに、彼女は妖艶な声で応える。

「気に留めなくてもいいのよ。あなたは、それでもいい仕事をしたわ。幸い、あの職人の生き残りは弾き者。私たちについては、なにも知らない。それどころか、あの村がこちら側にいることすら感づいてもいないわ」

「ですが――」

「完璧主義もほどほどに、ね。それで気がおかしくなってしまうって私の可愛い坊やが坊やじゃなくなる方が、私は怖いのに」

「勿体なきお言葉です」

「いいえ、本当のことよ。けれど、そうね……。勇者一行もいるんでしょう？」

「はい。一戦交えましたが、その職人の奇襲に気付かず、撤退しました」

「仕方のないことよ。あの傷では、本気も出せないでしょう？　冷静な判断だわ」

「有り難うございます」

「けれど、彼らは力をつける前に、消しておかないと……」

「俺に、どうか俺に、任せてはいただけませんか？」

「……あなたは、私にとって大切な。だから――」

「彼らを倒せるのは、魔王様か俺だけです」

「……そう、ね。この件は、あなたに一任するわ」

「はっ。この命に代えても、必ずや」

「本当に死んではダメよ？　私の可愛い坊や」

「承知しました」

「ぬうん！」

ドゴン、となにか重たいものが地面に落ちる音。それはあの職人の彼女の家の焼け跡、その崩壊した外壁のブロックをどかした音だ。「あんた、魔法使えるんだろう？　いい加減あの……ハルだっけ？　みたいに肉体強化したらどうだい」

「いや、これも修行の一環だ。魔法で肉体を強くしても、器が魔法に負けては意味がない。そのためには――」

いいながら、軍司はまたブロックを持ち上げる。

「日々、是、精進！」

投げる。落ちる。轟音。先程から、これの繰り返しだ。このブロック、見た目は少しだけ大きなブロックという感じだが、重量はかなりある。というより、見た目が詐欺だ。それをここまでできる時点でまあ常人ではないが、彼はさらに人の域を越えたいらしい。黙々と、その作業を繰り返していた。

「まあ、勝手ってやつかね」

少しの尊敬と多分の呆れを混ぜ込んだ呟きと視線を、然り気無く彼に送る。が、気づかない。無理もないが。

「ん？ ちょっと待ちな！」

「は？」

軍司は、持ち上げたブロックをそのまま抱えた状態で止まる。

「感応石だ。けど、こんな純度の高いのは見たことがない」

それは、彼が持っているブロックの側面に、嵌め込まれたようにしてあった。ちょうどビー玉くらいの大きさの、虹色に光る、丸い石。いや、石というより――

「なんか、水晶みたい……」

いつの間に来たのか、晴が呟く。しかしその通りで、それはあえて言うなら感応石ではなく、感応水晶だ。

「そう、感応石ってのは、純度が高まるにつれて大気中のわずかな魔力を吸って、輝くのさ。それは周りの魔力の属性で輝きが変わるんだけど、これは多分、光の魔力だね」

「光？ 九重、そうなのか？」

「……うん、光の波動が見える。でも、周りに光なんてないし。むしろ闇ばかり？」

「思念付随型魔力の大量吸収……？」

「思念付随……なんだって？」

「《思念付随型魔力》。魔法つてのは基本思いなんて乗らないんだけど、たまに例外として、誰かを助けたいとか、思い出とか、そういうのが乗るんさ。そこに感応石があると、思念付随した魔力だけを一気に吸い取る。それが《思念付随型魔力の大量吸収》。とは言え人の生成した感応石にそれを受け止めきる器はないから、普通は壊れるんだけど……。もしかしたら、それによって周りの感応石が融合のしたのかも――」

「思考に更けるのはいいが、降ろしていいか……？」

見れば、軍司の額にはうつすら汗が滲み、腕やら足やら小刻みに震えている。

「ぬわっつ！ すまんすまん。できれば石を上にして置いてくれ」「ああ」

言って、少しゆっくり目にブロックを下ろす軍司。置いたと同時に、深く息を吐いた。

「いやあ、死ぬかと思った」

「それにしてもこれは珍しいな。こんなに純度が高いのは……」

「駄目だ、聞いちゃいねえ」

「ドンマイ」

子供のように目を輝かせる彼女と、悪態をスルーされてくれる軍司、そしてなぜか楽しそうな晴が、絵になる様でそこにいた。

第十五話 純度100%!? 奇跡の感応水晶（後書き）

休載のお知らせ

樹海にはいきません爆

この頃シリアスの書きすぎ+リアルもゴタゴタしてなかなか執筆が
できなくなってきました。

少し落ち着いたら別の作品で調整していこうと思うので、またよろ
しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2020x/>

勇者なんてお断りだ！

2012年1月7日07時46分発行